

2013年4月10日

湖北省武漢市について

上海産業情報センター

横江 隆弘

武漢市と聞いて、すぐにイメージが思い浮かぶ方はどの程度いらっしゃるでしょうか。今回は、上海市から西へ1000^キ離れた内陸の街・武漢市を紹介します。

湖北省は、日本人にとっては、三国志の中でとりわけ有名で、映画「レッドクリフ」で取り上げられた「赤壁の戦い」が行われた赤壁市があり、また、「三峡下り」で有名な三峡ダム(70万KWの水力発電設備32基を備えた世界最大の水力発電ダム)のある場所といえ、なるほどと思われる方も多いかもかもしれません。

太極拳に詳しい方は、太極拳発祥の地・武当山がある場所としてご存知かもしれません。

最近では、内陸部において、最も自動車組み立て工場が集積している場所としても注目を集めています。今回は、その地域の状況を踏まえながら報告したいと思います。

1 湖北省武漢市の紹介

湖北省は、現在15市1州1区あり、人口は約5,800万人で、面積は、18.5万平方キロとなっています。2011年の湖北省の域内総生産額(GRP)は、1兆9632億元です。このうち武漢市の占めるGRPの額は、6762億元に上り、省内の34%を占めるに至っています。また、人口は、1002万人で省内に占める割合は、17%となっています。

これらの数値からもわかるように、湖北省においては、武漢市に一極集中した経済発展をしており、「大武漢」として中部の経済の発展の要として発展し続けています。

武漢市は、地理的にみると、東に上海、北到北京、南に広州、西に重慶の各都市と約1000^キの距離の圏内にあり、飛行機で1時間半から2時間で結ばれており、高速鉄道も発達して各都市へ3-5時間で行くことができます。中国の東西南北を結ぶ交通の要衝となっている。

武漢市の中央を長江が流れており、大きくわけて漢口、武昌、漢陽という三つの鎮と新しい街(開発区)の漢南区の4つに分けることができます。市内には、2010年に新規開通して以来、現在2本の地下鉄が開通しているほか、10路線の建設が計画されています。商業の街漢口と政治・教育の街武昌を結ぶ武漢長江トンネルが2012年12月に開通して、交通渋滞の緩和、

産業の活性化が促進されている。

武漢市の特徴の一つとして、特筆すべきは、20-24歳人口が突出して多く、人材資源が豊富であるということです。1000万人の都市人口があり、裾野が広い上に、流動人口が少なく、地元民が多いために、離職率が低くなっています。

さらに、湖北省には86の大学・高等教育機関があり、その数は中国の中で、第3位になっています。そのうちの90%が武漢市にあります。また、大学在籍者数は、118万人に上り、中国第1位となっています。そのなか日本語学科で学ぶ学生は、約4000人であり、毎年1000人の日本語人材が供給することになるのですが、現状ではそれだけの人材を受け入れるだけの日系企業が進出しておらず、日本語人材においては、供給過剰で、買い手市場となっているようです。

2 武漢市内各開発区について

現在、武漢市に進出している日系企業は約250社で、武漢市に在住する日本人は、約500名くらいです。主な日系企業は、ホンダ、日産、新日鉄、住友電装、ブリジストンなどです。

(1) 呉家山経済開発区(漢口)

武漢で最も歴史のある開発区です。

開発区の全体の広さは、497平方KMです。

武漢北西部の郊外に位置しており、武漢空港にも最も近い開発区であり、この特徴は、華中地域唯一の保税物流センターがあることから、物流企業の集積があります。また、コカコーラに代表される食品・飲料関係の企業が集まる食品加工区があることです。

上記のほか、機械電子、航空、生物医学、観光などの産業の企業が約3000社進出しています。自動車関係のサプライヤー企業も40社ほど進出しており、そのうち16社が日系企業とのことです。

(2) 武漢経済技術開発区(漢陽)

1993年頃にできた開発区で、広さは200平方KMです。

自動車及び自動車部品、電子機器、製紙印刷、食品飲料、新材料という5つの分野に重点が置かれていますが、この特徴は何と言っても自動車及び自動車部品ということになります。約3000社の進出企業のうち、60%以上が自動車及び自動車部品メーカーとなっています。

とりわけ、中国自動車メーカー最大手の一つである東風自動車、東風と日産自動車の合弁企業・東風日産の本部(工場は、襄陽市にあります。)、東風とホンダの合弁企業・東風本田、東風とフランスのプジョー・シトロエンの合弁企業・東風プジョー・シトロエン自動車という4大自動車メーカーとそれを取り巻く自動車部品・関連企業が進出しており、自動車産業の一大集積地となっております。現在年間で約70万台の車が生産されております。

(3) 武漢東湖国家高新技术開発区(武昌)

2009年に中国国務院から北京・中関村に次ぐ第二のハイテク開発として選定されてから、光電子情報産業を中心に発展してきています。光通信、モバイル通信を中心に、レーザー、光学ディスプレイ、LED照明、ICチップなどの技術開発が中心のハイテク開発区です。

同区にある「武漢・光谷」は、中国の光電子情報分野のパイオニアとなり、世界市場にもすでに進出しています。同分野の企業の進出が最も多く、全体の5割近くを占めております。主な外資系企業は、GE、NOKIA、FOXCONN(富士康)などです。

(4) 武漢・漢南区開発区(武昌)

最も新しい開発区で、開発予定面積は、237平方KMですが、現在開発済みなのは、23.6平方KMです。

今後、開発が期待されているところですが、現在進出している日系企業は、丸一鋼管、広州ミツバ、王子製紙などです。

武漢は、やはり自動車産業の集積地としてのイメージが強いです。2015年までに自動車生産を150万台までに伸ばすという計画もあり、既進出のメーカーの工場の拡大・増設だけでなく、GM、ルノー、VW、韓国KIAなどの進出も予定されています。

上海産業情報センターでは今後もこれらの状況の変化に注視していきたいと考えております。